



# ひこばえ



発行 京都教区教化委員会  
共同教化部会(仮)  
075-351-5260  
kyoto@higashihonganji.or.jp



## 石西組 懇談会

ひとつの寺では  
できないことを...

島根県益田市。広島から浜田道を経て2時間、冬の日本海を横目に国道9号線を走ると、益田の街が見えてくる。石見地方とは、島根県西部の呼び名である。京都教区においては石見地域を石東・石西に分けられ、石西組は益田市・鹿足郡の計10ヶ寺で組織される。沿岸部の益田から、中国山地の広島県との県境に及ぶ広大な組のため、組内寺院間の移動には最大1時間20分を要する。

3月6日(水)午後2時  
門徒(5名) 坊守(3名)  
住職(2名) 組長・副組長  
共同教化部会主査・ZOOM参加  
(2名)・駐在教導

▼懇談会のはじめに、前田組長から石西組の現状について詳細な資料をもとに説明をいただいた。かつては「住んでみたい田舎」にも選ばれた地域であるが、組内寺院が含まれる地区の高齢化率はいずれも上昇傾向にある。各寺院の生計状況は1ヶ寺を除いて全てが兼業寺院。無住寺院もあり、過去には2ヶ寺が廃寺となっている。▼組で実施する事業は2年に一度の同朋の会推進講座、ブロック別同朋会、年に一度の同朋大会などであるが、最大の特色は毎年夏休みに一泊二日で開催される子ども会が挙げられる。2005年から始まったこの事業は、お寺を会場に近辺の自然の中で思いきり遊ぶというもの。宿泊は本堂で、食事も全て会場寺院の門徒が準備される。組内全寺院の住職もしくは坊守がスタッフとして関わり、近年は門徒以外の子どもへの参加も見られるという。▼石西組には同朋婦人の会という組織があり、子ども会の食事などの協力は不可欠なのだそう。多くの人が関わる事業だからこそ、組内における日常の意思疎通や人間関係が大切になってくると、前田組長は語られた。



◆組長からの事業報告に続き副組長より、当部会の2022年度事業報告書に対する感想が述べられた。副組長からは全体を通して部会活動の方向性がわかりづらいこと。課題認識について、寺院の課題ではなく地域の課題ではないか？出向く教化とは地域社会にこそ出向くべきではないか？教区事業の点検体制が不十分であること、そして何より同朋社会の顕現に向けた意識改革の必要性について、事前に指摘と提言をいただいた。

「難しいことはわからんけど、  
こういうもの作るのが好きでね」



門徒さん手作りのいちご大福

### 教化をめぐる対話

◆石西組では数年前から、教化事業展開に向けた課題整理と推進手法について、経営的視点を取り入れた手法でアプローチを試みている。そのひとつが5W1Hで表現される「同朋社会の顕現」という言葉。「いつでも、どこでも、宗門に属する者が、全ての人々に、仏の教えを伝えて、心豊かに生きることに出来る社会を実現する」という、石西組独自の表現。ひいては「寺の役割・存在意義」をテーマに、対話を続けてきたとのこと。◆伝える手段、手法も大切ではあるが、長い時間をかけて自分にも伝えてきた教えに本音が出ているのだろうか？その確かめが無いままに、どれだけ上手に言葉を並べたとしても、それは伝わらないのではなにかとの指摘をされる参加者も。教化をめぐる対話、ここにはある。

### 雑感

石西組の寺院数は十ヶ寺、門徒戸数は約六百戸、寺院間は信号のほぼない道路で最大一時間半弱という環境です。今回「共同教化」という課題について意見交換しました。石西組では「共同」して教化事業を行ってきた歴史を思い起こされました。同朋会運動が始まり、推進員養成の講座名称は変わりませんが、現在の同朋の会推進講座にいたるまで続けてきています。そして教化する人・教化される人として、僧侶・寺院と門徒が分かれるのではなく、推進員や組門徒会員が一緒になって進められました。推進員住職・坊守も引率する意識ではなく、受講者として同朋会館での生活を楽しみにしていることもあります。また同朋会運動推進の中で離れることはできない部落差別の問題も、石見地区の事業ですが、以前は毎月のように僧侶門徒が集まり学習会もなされていきました。先述のように広範囲で不便な環境にもかかわらず、およそ50年間住職・寺院・門徒がともに、間法の場所をつくり、親鸞聖人のお姿をしのび、教えを聞き続けたと感じます。そうした環境が背景にあるからこそ、一泊二日の子ども会が約20年続けられ「とも」に現在も組教化事業が実施できているといえるでしょう。住職に限っても様々です。専業主婦の人、校長や企業代表を退職した人、保育園園長、事業を営み兼業する人などなど年齢経験も様々です。各寺の先代住職もそうであったように現任職も、その違いや経験を互いに認めあい、教えを「とも」に聞き、道を求めつづけていく人として、互いに敬う関係があるのではないかと、そう思います。この15年「話し合い、聞き合い」の場が組事業で難しく減りました。「とも」の前提にある一人ひとりの違いや歩み悩みが語り、聞きあえる場が再開できたと思います。石西組組長 前田賢龍